

「ささえ」

2016 年 7 月発行 情報誌 第 56 号

発行NPO福祉用具ネット事務局

住所: 福岡県田川市伊田 4395 (福岡県立大学内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyogunet@sage.ocn.ne.jp

新 URL <http://npofukusiyogu.sakura.ne.jp>

情報誌「ささえ」は年 4 回(1 月・4 月・7 月・10 月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神 1 丁目 13-5

福祉用具はあなたの自立をさえます。

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします。

【商品名】自動排泄処理装置
尿吸引ロボ「ヒューマニー」



夜ぐっすり眠れるから
昼間頑張れる！



【発売元】大和ハウス工業(株)

ヒューマニーの上手な使い方は、本NPOのホームページに詳しく掲載しています。

洗髪シャワー



NPO福祉用具ネット開発品
第 1 号

【製造元】

(株) 福祉SDグループ

平成 27 年より、充電式も発売
開始。【発売元】キヨタ(株)

**NPO福祉用具ネットが関わった
主な開発品**



アルファブラ
ソラ クッション



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

熊本地震を体験して

NPO 福祉用具ネット理事長 豊田謙二
(熊本学園大学社会福祉学部・教授)

避難所生活の始まり

2016 年 4 月 14 日午後 9 時 30 分、その後 16 日未明 1 時 25 分、熊本地区は震度 7 の大きな 2 回の地震に見舞われます。気象庁は後に、14 日の地震を「余震」、16 日を「本震」とよぶことになります。

ここから熊本地震の始まりです。私はこの 2 回目の「本震」直後から、避難所での生活を始めます。自宅マンションの玄関に「イエローカード」が張られ、

「この建築物にはいる場合には十分注意すること」、という「注意」が掲示されています。なお揺れる大地の合間を縫って、自宅に入り貴重品やメガネ、腕時計、財布、部屋のキー、洗面具、下着などの着替えなど、気づくとふた山の荷物です。偶然にも、隣人と避難所生活を始めて、このマンション帰りも同伴です。1 人が部屋で持ち出す荷物の整理、1 人は次の地震の備えで外にいます。大きな揺れでのマンション崩壊への注意なのです。

避難所での暮らし

この「避難所」は民間の、宗教団体の所有する建物を活用するボランティアの避難所です。ですから、法律上の「指定避難所」「福祉避難所」ではありません。だから、「避難所」でありながら、震災後の自宅よりも快適な生活を維持することができました。

水は地下水で確保、トイレも常に清潔で、快適です。食事は 3 食付き、支援物資の届くまで、贅沢なほどの料理が食卓を飾り、丁寧なもてなしを提供していただきました。

私が避難所生活を始めてまもなく、勤務先の熊本学園大学に「避難所」が開設されたことを知ります。たくさんの、様々な理由を抱えた人たちが、震災直後からおよそ 700 人がここを訪れます。

私は避難所の住民ですが、同時に大学の避難所での支援にも出かけます。大学の避難所は、法の「指定」あるいは「福祉」避難所ではないのです。いわば、ボランティア「避難所」なのです。つまり、法的な定めのない、自主的な「避難所」なのです。このボランティア「避難所」に法指定の避難所から移住する人が増加するのです。

「指定避難所」や「福祉避難所」が、本来の責務を果たしていないように思えるのです。

「避難所」について解説してみたいと思います。

「避難所」って何？

「避難所」は「災害対策基本法」に定めがありますが、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災において「避難所」の不足・不備・未整備などの課題が明らかになります。そこで、2015 年 6 月に災害対策基本法が改正され、「避難所」についても市町村長が一定の基準に適合する施設を「指定避難所」として指定することが義務づけられたのです。

同年 8 月には、その改正の具体化として、「避難所」における良好な生活環境の確保に向けた取組指針が策定されます。この「指針」のなかに、「常日頃から有事に備えた取り組みをお願いしたい」、と記されているのですが、熊本地震ではそもそも被災の大きな町村ほど、本庁舎が甚大な被害を受けて「指定避難所」として住民を受け入れることができないのです。

「福祉避難所」は、「要配慮者のための特別の配慮」がなされた避難所であり、10 人の要配慮者に 1 名の生活相談職員等が配置され、またバリアフリー化などの構造的整備が必要とされています。熊本地震におけるこの「福祉避難所」の現状について検証の必要があると思います。

支援物資の配給

16 日の「本震」によって、高速道・新幹線はもとより、在来線も通行が不可能となり、人と物の交流が途絶えます。3 日目ごろから、「支援物資」が少しずつ避難所に届くようになります。朝・昼・夕の 3 食の提供が始まります。「1 人 1 つずつですよ」、という時には、バナナ、おにぎり、レトルト食品などが配給されます。

「配給」という用語に違和感を抱きつつも、それでも列に並ばないと「配給」をいただけないのですから、障害があり並べない人には酷なことでしょう。でも、実際にはそれほど心配はいらないのです。専門職が介入する前に、「お節介」な人が、つまり「世話」好きな人がこの課題を簡単に片づけてくれます。

こうして、配給の度に顔を合わせ、挨拶を交わす内に、日々の会話が積み重なりながら、避難所における血縁も地縁もない人と人との「あいだ」に何かが始まるのです。「おしゃべり」です。挨拶・おしゃべりの「あいだ」を持つのが、配給なのです。それが対面の機会を生み出すのです。

集団生活と個別的ケア

避難所は家族中心の住居とは異なり、多人数でありかつ集団的生活であります。避難所を外から眺めますと、まとまりのある集団に見えてきます。その視点からは、「避難所」は避難者・被災者グループ、「被災弱者」の集まりなのです。ですから、支援物資は支援者・援助者から避難者・被災者に配給されるのです。それは、「施設」の姿なのです。被災地熊本が大きな「施設」にも見られるのです。

そうした自戒を試みますと、先人の賢明さの意義が蘇ってきます。1923年9月1日に発生した「関東大震災」の時のことです。90年ほど前のことになります。この大震災に際して、東大・一高・東洋大学の学生たちが避難者約2000人に、食料を配る支援活動に入ります。食料調達グループは買い出しに、配るグループは公園に集まった避難者を集め、「ご相談があります」、そしてこう提案します。

グループに分かれて、それぞれに「委員長」を選び、食料を提供するので、グループごとに配りましょう、と。そうすると、グループ内でも並べない人や食料を抱えられない人など、人の顔が見えて話ができます。困りごとにも耳を傾けられます。今日の言葉では、「自治」のグループづくりです。やがて、彼ら学生は、それぞれの「避難所」で聞き取りをしながら、避難者・被災者の名簿を作成して、不明者探しの情報センターを立ち上げるのです。

「施設」ではなく、「自治」のグループによる自主的な活動は、避難者に自分の「尊厳」を気づかせることであり、避難者がやがて自己再生に向かうことをサポートするきっかけになるでしょう。避難者が「援助を受ける役割」から、「あなたが決める人」そして支援者は「私は支える人」へと転換するには、こうした当事者「自治」が必要に思われます。

避難所を閉じます

いわゆる「避難所」は、緊急的・一時的な支援のためのものです。私の居た避難所は、4月の末に避難所の人に向けて、「ここを5月上旬に閉じたい」と申し入れました。

震災直後には、100名を超える人で大きな部屋二つが満杯の状態でした。子連れの家族、老夫婦、障害のある人の家族、単身での障害のある人、それに単身での女子や男子、という具合にまさに多彩な顔触れです。避難所に来た理由や今後の方針なども、当然に多彩であります。一点だけ確実なことは近い将来、避難所を去ることです。

単身で、障害もなく、お元気ながら避難所生活の、朗らかな人がいます。Mさんと呼んでおきます。震災から5日後にここに来ました。その時、若い女子を伴っていました。

Mさんは70歳代の後半に見受けられます。ここでは、こそこそ話は出来ませんし、聴きたくなくとも聞えてきます。どうやら、Mさんの自宅は全壊して立て直しは不可能、月の収入は7万円。兄弟は多いようですが、Mさんを援助できそうにないようです。この避難所には、高校での避難所を追われて、同伴の女子と移ってきたとのことです。盛んに、前の避難所の悪口をたたいています。

このMさん、やがて、この避難所から大学の避難所に移動します。大学の避難所でしばしお付き合いすることになります。今度は、私は大学側のボランティアですが。大学は、避難所を必要とする人がいる限り開放する、という方針を公開していましたから、Mさんが移って来られたのです。日中は住居探し、夜は大学避難所、という生活を続けますが、「要介護」のない元気な高齢者が自宅を失うと、しかも月に7万円の収入では住居探しは容易ではありません。でも、その支援が「社会福祉」、つまり「ソーシャルワーク」ですから、大学は避難者全員の自主退去を支援し続けたのです。

こころのケアとは

震災後、1ヶ月半を経過しています。メディアは一斉に「こころの傷」「こころのケア」を見出しに掲げて、「住居からこころへ」と報道の重点を移すかに思えます。依然として、住居の課題は解決できません。テントや車を宿にしてなお、多くの人が生活しています。熊本地震では「車中泊」が多く、したがって自宅外の「避難者」の実数はつかめないのです。大学の駐車場も常時満車状態でした。

「こころ」は身体の外に実態を持っていません。つまり、実在していないのです。ドイツ語の「Psychisches Trauma」（精神的な外傷）からの訳語であり、比喩なのです。正確には、「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」と呼ばれ、不安・不眠・抑うつ・侵入性想起などの症状が現れます。それとは区別されるべきは、「精神的ストレス」であり、震災後の生活上の困難性などに起因するものです。

「精神的な外傷」が重視されるのは、熊本地震という災害による「外傷」を個人的責任としないで、社会的責務として支える、ということにあります。つまり、「共に生きる」というこの社会の姿勢に基づく支援であると思います。その「精神的な外傷」においては、衝撃的体験が記憶に刻まれ、それまでは日常的に行われてきた思考の回路がその「記憶」の介入で、順調に機能しなくなるのです。思考の回路を自分で取り戻すには、精神科医や専門職に聞き役になってもらうことなのです。

避難所生活で貴重な体験を得て、少し思い出を語ってみました。

熊本地震でのボランティア活動を通して ～自分に何ができる?～

NPO 福祉用具ネット理事 海尾美年子 (理学療法士)

私の実家は熊本市東区にあります。4月に大きな地震がありました。90歳近い両親が暮らしており、両親の安否確認を兼ねて震災ボランティアに2回行きました。そこで感じたことを報告いたします。

1回目は熊本学園大学にある豊田先生の教授室の片づけのお手伝いと避難所(小学校)でのトイレ掃除、支援品の整理、配食のお手伝いをしました。

豊田先生のお部屋は壁にひびが入り、本が散乱し足の踏み場のない状態でした。先生と一緒に、ひとまず本棚に本を収める作業をしました。先生の蔵書の多さにはびっくりしたのと、段ボールに割れないように焼酎の1升瓶が大事に保管されていたのには、思わず笑ってしまいました。避難所での支援は、毎朝、熊本市災害ボランティアセンターの受付に並び順番に仕事を振り分けてもらうことから始まりました。とても大勢のボランティアが全国各地からかけつけていました。学校が休みということもあり、高校生や大学生、親子連れもありました。自動車で車中泊をしながら時間の許す限り参加されている方もいました。4人一組で指定された避難所に行きました。小学校の先生方が24時間体制で被災者の方のお世話をされていました。現地で要望を聞いて支援活動が始まります。訪れた2か所の避難所とも、トイレまでなかなか手がまわらないとのことで、避難者が利用するトイレをひたすら磨きました。昼間は若い方は仕事で居らず、高齢者が教室の床に薄いマットを敷いて横になっている姿を多くみかけました。見ただけできつそうな状態でした。こんな生活が長く続けば身体によくないに違いありません。運動量も少なく、廃用性の身体機能低下が想像できました。トイレ掃除は避難者や先生方からとても感謝されましたが、みなさんの疲労はひとめ見ただけでもわかるものでした。私たち4人はお返しする言葉がなかなかみつかりませんでした。「ひとつてすごいな」と実感した日でした。

2回目は豊田先生に紹介いただき、先生の勤める熊本学園大学の避難所に行きました。熊本学園大学は震災が起きてすぐから、学園内ホールを障がい者、高齢者、一般の方に避難所として提供していました。運営は大学がされており、教員、学生や福祉関連のボランティア、近隣の施設、病院からのボランティア、全国からの行政の支援者の方々が交代でいろんなお世話をされていました。地震発生時はホールだけでは収まり切れず、近くの教室にも被災者がいた

そうですが、私が訪れた時は10人の障がい者と20人位の一般の方が寝泊まりされていました。ここに来てまず最初に感じたのは、1回目の時と同様スタッフの疲労感でした。スタッフの仕事は避難者の生活全般の支援です。一般の方々は、ADLこそ自立していますが、地震(余震)への不安や帰るべき家がない事への不安で精神的に不安定にみえました。スタッフはそういう方々にひとりずつ面談をされ、今後の方向性についての支援をされていました。障がい者の方には日々の健康のチェック、必要な人には介助を。食事は配給品や各地のボランティア団体で作ってくれたものです。私がいた時は神戸の施設の方が、神戸の震災の時に世話になったからと何かも自分たちで準備して、神戸から車で来ていました。ここでも「人ってすごいな」と思いました。入浴は近所のスポーツクラブや施設にもらい風呂でした。私も同行することができ、その施設のスタッフの言葉や対応には涙が出る思いがしました。施設も被災しており大変な状況なのに何でこんなに他者に対して優しくできるのだろうと思いました。このような混沌とした状況で自分にできることは、リハ職としてできることはと考えた結果、スタッフや被災者の全身のストレッチ、マッサージをしようと思い、一人ひとりに声かけし、身体を触らせていただきました。そしてリハビリのできる方には日頃されているメニューをできる範囲で行いました。皆さんにとっても喜んでいただき私も嬉しくなりました。リハビリは近くの病院のセラピストが、夜、仕事が終わってからボランティアで来ていました。同じ職業として本当に頭の下がる思いがしました。被災者の皆さんの問題は帰る家が見つからないということでした。熊本学園大学は「皆の帰る家が見つかるまで避難所の提供を続ける」との方針を出し本日(5月末現在)に至っています。

震災ボランティアで感じた事

地震発生以来、被災者支援のスタッフは身心ともに緊張状態が続いており、その疲労度は高いと思いました。被災者を支援するスタッフの支援の必要性を大きく感じました。身体のストレッチやボランティアでのヘアカット等、人から触れてもらった事でとても癒されたとスタッフの1人が言われました。手と手のふれあいは何か不思議な力があるのでしょうか。これから先、復興に向けてまだ時間がかかります。私もできる範囲で震災ボランティアを続けます。

タイカから新製品のご紹介 ～アルファプラ ビオのご紹介～

株式会社タイカ ウエルネス用品部 狩野 仁志

静止型ハイブリッドマットレス®

アルファプラ
ビオ



圧切替型への挑戦の歴史

床ずれ防止マットレスには圧切替型マットレスがあり、主に床ずれ発生リスクの高い方に使われています。しかし、ささえ50号「アルファプラ ソラのご紹介」でも記した通り、圧切替型は万全ではありません。そして当時当社はその解決策としてソラを開発しました（NPO 福祉用具ネットが開発したP-wave がベース）。圧切替型のエアセルの上にウレタンフォームを敷くことにより、圧切替の身体への負の影響を軽減し、さらにハイブリッドマットレスという新しいジャンルを開拓しました。

その後、静止型マットレスでは不可能と言われていた低体重の方の体圧分散を実現したアルファプラ F を開発しました。

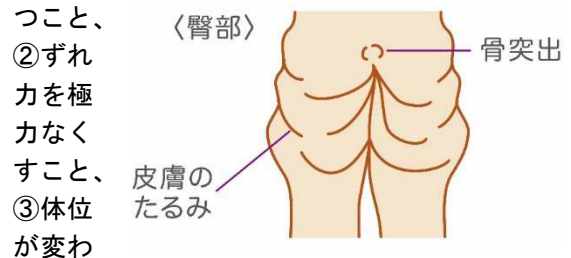
こうしたソラ、F の開発後も、床ずれ発生リスクの高い方向けのマットレスに、体圧分散と快適性を同時に提供する方法があるのではないかと考えていました。そんな時に、高齢者専門のある病院で圧切替でないエアマットレスとウレタンマットレスを組み合わせて、床ずれ発生リスクの高い方に使用しているのを拝見しました。その理由を尋ねると「日本人の高齢者の皮膚は非常に脆弱でたるんでいる。その上痩せて骨突出があるため、圧切替で発生するずれ力でさえ悪影響を与えてしまう」とのこと。その病院では、床ずれの治癒期間を 1/3 にしたという経験もあると聞き、これはご利用者に体圧分散と安定性、快適性を提供できると感じ、開発することとなりました。

日本人高齢者の身体は外力の影響を受けやすい

高齢者の身体の顕著な特徴は、皮膚が非常に脆弱なこと。加齢により皮膚は乾燥して弾力性や張力が低下し、たるんできます。たるんだ弱い皮膚に加えて日本人高齢者には、痩せや骨突出といった特

徴があり、非常に外力の影響を受けやすくなります。

こうした日本人高齢者ができる限り外力を受けずに安静に過ごしていただくために、①極力低圧で保



つても自動で低圧で保持すること、④在宅でも使いやすいこと、を開発テーマとして掲げました。

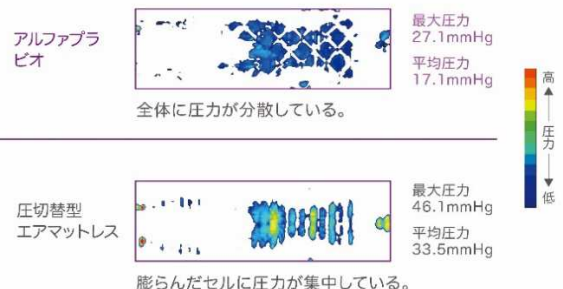
ビオの特長 ①超低圧

アルファプラ ビオは、エアセルの下にウレタンフォームを配置した 2 重構造です。上層のエアセル内の空気の量をギリギリまで減らし、体圧分散する面積を最大限にすることができました。下層にウレタンフォームがあるため、底付きの心配がありません。これにより従来の圧切替型エアマットレスの約 2 倍の体圧分散性能を実現しました。



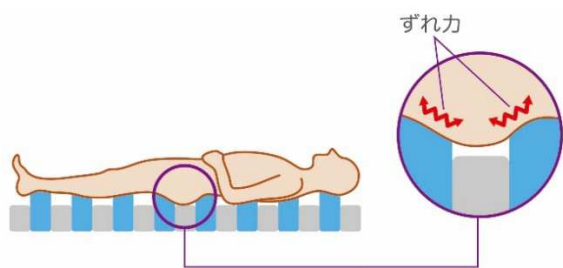
指一本分の厚みまで空気を減らします

●体圧分散性能の比較 被験者：170cm 65kg 男性（当社測定）



ビオの特長 ②ずれ力を軽減する

圧切替型マットレスの圧切替時のずれ力を計測したところ、約 3～5N でした。こうしたわずかなずれ力でも高齢者の皮膚には影響を及ぼします。

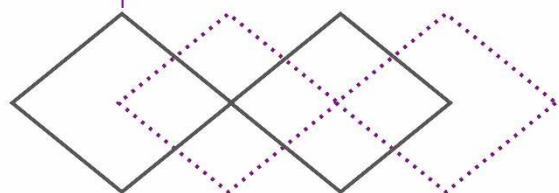


圧切替時に皮膚にかかるずれ力

静止型エアセルにすることにより、こうした圧切替時のずれ力はなくすることができますが、さらに私たちは、背上げ時のずれ力を軽減し、かつ骨突出がはまらないエアセルの開発に取り組みました。エアセルの試作は20回近くに及び、試行錯誤の結果、横に長いひし形上のエアセルを上下に50%ずらした2重構造になりました。横長のひし形が倒れることにより背上げ時のずれを緩和し、上下ずらすことにより骨突出がはまらなくなります。しかし最も苦労したのは、体圧分散と安定性のバランスでした。エアセルを厚くすれば体圧分散はよくなりますが、安定性に欠けます。



上層の菱形のエアセル

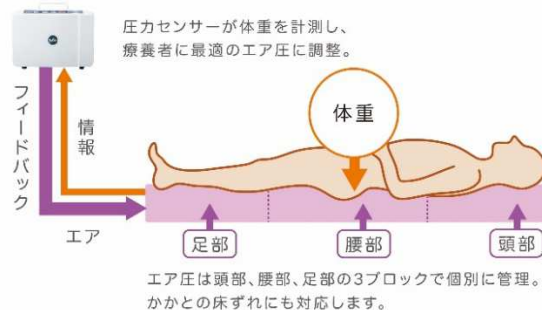


下層の菱形のエアセル

バイオの特長 ③体位が変わっても自動で低圧を保持

エアセルの指一本分の厚みを常時保持するのは、従来の圧力コントロール方法では不可能です。言い換えるなら超低圧を保つことは100点の体圧分散を目指すことと言えます（従来の方法は70点を目指すと言ったところでしょうか）。つまり、ご利用者1人1人にカスタマイズされた最適の体圧分散が必要と

なります。我々は独自に開発した体重フィードバックシステムを導入し、ご利用者の方がバイオに寝ただけで体重を自動で計測し、その方に適した体圧分散をします。更に、エアセルを頭部、腰部、足部の3ブロックに分け、それぞれ個別に圧力を調整します。



バイオの特長 ④簡単操作

（株）タイカは極力シンプルな構造にこだわります。在宅では老老介護、独居の高齢者の方など複雑な機器に慣れていない方が多くいます。そうした方でも安心してお使いいただけるように、操作方法を検討しました。検討の過程では炊飯ジャーや洗濯機の表示パネルや操作方法も参考にしました。

●操作パネル



●様々な姿勢にもワンタッチで対応

●ひざ用席

●指圧器

●電上げ

まとめ

アルファプラ バイオが提唱する「超低圧で安静を保つ静止型ハイブリッドマットレス」は、日本ではまだ新しい考え方です。しかし現時点で、静止型マットレスのタイカが、静止型を追求した最適の手段と考えています。是非皆様にお試しいただけましたら幸いです。

あとがき

NPO 福祉用具ネット様にもご協力いただき、皆様にもご好評をいただいておりますアルファプラ ソラにつきましては、製造委託先の事業撤退により、止むを得ず7月をもって販売終了となります。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきたくよろしくお願い申し上げます。

平成 28 年度の通常総会のご報告

NP0 福祉用具ネット理事 左 広美

豊田理事長のあいさつにふれて

平成 28 年 5 月 20 日（金）18:30 より福岡県立大学附属研究所中セミナー室において、NP0 福祉用具ネット平成 28 年度通常総会が開催されました。冒頭の豊田理事長の挨拶には思わず涙ぐんでしまいました。実は、豊田理事長は 4 月の熊本地震の被災者です。これまで経験したことのない激しい揺れに、着の身着のまま屋外へ飛び出し、足を怪我し、その後は避難所生活を続けておいででした。そのような生活を送っていた理事長。心落ち着かず脚の痛みも癒えないにも関わらず、理事長としての責務を果たすべくこの日、会場にられました。

理事長挨拶では、地震発生時の状況やその後の避難所生活について話をされ、避難所生活をしながら避難者のお世話をしている様子について報告がありました。そして、皆さんからの励ましやお見舞いへのお礼の言葉を述べられている時、普段は冷静で感情を表に出さない豊田理事長の声がかすれ、言葉が詰まりそうになりました。

理事長のこの挨拶にふれ、被災地で不自由で不便な生活をしている方々の大変さに改めて自分にできることは何だろうかと考えさせられました。こうして平成 28 年度の通常総会は始まりました。



豊田理事長のあいさつ

平成 28 年度通常総会の次第（一部）

通常総会の式次第は表 1 の通りです。

議案 2 および 3 は異議なく承認されました。続いて議案 4 については、新しく理事 1 名を補充いたしました。新理事は福岡市介護実習普及センターで相談員をしている辻奈美さんです。

また、このたび長いあいだ監事をつとめていただいた田島靖さん、小野靖史さんより退任のお申し出



があり、新しい監事には船津隆司さん（福祉 SD グループ取締役）と佐々木寿生さん（（株）cocotama 代表取締役）が就任されました。辻さん、船津さん、佐々木さんからそれぞれ就任の挨拶がありました。

○会員数 122 中、出席 21、委任状 78
（総会成立）

議案 1 議長など選出

○議長選出 朝比奈聡 理事

○議事録署名人 豊田謙二理事長、
坂田栄二理事

○書記 海尾美年子理事、井内陽三理事

議案 2 平成 27 年度の事業報告及び決算報告・
監査報告について

議案 3 平成 28 年度の事業計画（案）及び活動
予算（案）について

議案 4 任期満了に伴う、役員の改選につて

議案 5 その他

表 1 平成 28 年度 NP0 福祉用具ネット通常総会式次第

田島監事、小野監事に感謝の気持ちをこめて



田島
監事と
小野監
事は長
きにわ
たり、
監事を
務めて
いただ

きました。NP0 福祉用具ネットが健全会計を誇れるのはお二人のご指導のおかげです。お 2 人には感謝の気持ちを込めてお花を贈呈しました。田島さん、小野さんありがとうございました。

事務局だより

《28年4月から6月までの事務局のうごき》

3月の続き

3月15日 開発相談
3月18日 開発相談
3月23日 開発相談
3月29日 開発プロジェクト会議
3月11日 長崎佐世保ケアマネ研修会
情報誌「ささえ55号」発送

4月

4月5日 西日本国際福祉機器展打ち合わせ
4月6日 開発相談
4月7日 開発相談
4月12日 第1回福祉用具研究会
4月16日 理事会
4月21日～23日 大阪バリアフリー展
セミナー聴講・会員企業との打ち合わせ3件
4月28日 事例相談

5月

5月10日 日本在宅介護協会主催セミナー聴講（福岡市）
5月12日 開発相談
5月13日 キネステティクス体験講座
5月14日 監査
5月17日 開発相談
事例相談
5月18日 事例相談
5月19日 第2回福祉用具研究会
開発相談
5月20日 NPO福祉用具ネット通常総会
理事会
5月23日 NPOセンター・法務局へ、事業報告・
決算等報告書提出
5月24日 開発相談
5月27日 プロジェクト会議
アロン化成様より歩行車3台寄贈
5月30日 福祉用具国民会議署名締切
5月31日 企業との打ち合わせ会議
西日本国際福祉機器展セミナー企画会議

ささえ56号企画

6月

6月3日 労働基準監督署手続き
6月4日・5日 キネステティクスベーシックコース
6月14日 開発相談
6月16日 第3回福祉用具研究会
6月17日 安寿会主催 排泄ケア研修会 宮崎市
6月18日 キネステベーシックコース
6月20日 開発相談
6月21日 開発相談
6月22日 福祉用具体験講座

6月24日～26日 高知展示会
6月28日 北九州看護学校講義

ささえ校正・印刷・発送準備

《今後の予定7月以降の研修会・展示会予定》

研修会の受講者を募集しています！

7月2日 キネステ体験講座
7月12日 安寿会主催 排泄ケア研修会 大分市
7月15日 排泄ケア研究会 福岡市
7月30日 メンタルヘルスケア研修会 1回目
8月20日 排泄ケア1日コース
9月3日 おむつ検定
9月17日 移乗介助技術・動作介助技術・ポジショ
ニング技術研修会 基礎技術1日コース
9月18日・19日 移乗介助技術・動作介助技術・ポ
ジショニング技術研修会 技術習得2日コース
10月29日 メンタルヘルスケア研修会 2回目
11月24日～26日 西日本国際福祉機器展
西日本国際福祉機器展のセミナーの概要が決定

日時 11月24日（木）～26日（土）3日間
会場 西日本総合展示場 小倉駅から徒歩5分
NPO福祉用具ネットが主催するセミナーの概要

- ① NPO福祉用具ネットブース内セミナー
12のテーマで開催（詳細はホームページをご覧ください。）申込不要 無料
- ② FJC協会との共催事業
下元佳子氏の福祉用具活用セミナー
11月24日午後・25日午前の2回開催
事前申込必要 申込先はFJC協会。
NPO福祉用具ネットの会員は事務局大山まで。
定員100名 先着順 参加費用無料
- ③ 11月26日午後から「おむつ検定」と受験対策
講座を開催。事前申込必要 定員30人 テキストと
検定費用2,000円
- ④ 11月24日から11月26日までの3日間に、
キネステ体験講座を5回開催。事前申込必要 定員
15人 受講費用500円

福祉用具国民会議署名の結果のご報告

福祉用具国民会議への署名活動にご協力いただき
誠に有難うございました。

NPO福祉用具ネットに集まった署名数は2,810
名でした。たくさんの皆様に賛同していただき、心
より感謝申し上げます。

◆NPO福祉用具ネットの新年度会員を募集中です。
◆28年度の会員の更新手続きがまだの方も宜しくお
願い致します。
◆NPO福祉用具ネットからの新しい情報は「事務
局長のブログ」コーナーから毎日発信しています。
アドレスは<http://npo-fukusiyougunet.sblo.jp/>
NPO福祉用具ネット事務局長のブログで検索！
是非、一度覗いてみて下さい。